

辻洋装店社長がリング・チャケットさんを訪問 製造卸から独自店舗での直売へと拡大 クラシコの技術をベースに流行に 機敏なディティールを取り入れる

辻さん × リング・チャケットさん

異業種交流による情報交換を目指して、高級婦人服を専門に手がける辻洋装店社長の辻庸介社長に、イタリアクラシコ技術で最先端の紳士用ジャケットを作るリング・チャケットさんを訪問していただいた。

訪問者——— 辻洋装店社長 辻庸介さん

訪問先——— リング・チャケット

専務取締役 緒方克之さん

技術部長 金子一さん

工場長 金子実さん

クラシコ技術にこだわって50年 手作りの良さを生かす

大阪の南部、岸和田市と泉佐野市にはさまれた貝塚市は、井原西鶴描くところの「日本永代蔵」の舞台になった水間寺のあるところとして知られる。その貝塚市の静かな住宅街にあるのがリング・チャケット貝塚工場。リング・チャケットさんといえば、いまセレクトショップで人気のある幾つかのブランドを手がけるファクトリーである。

都心・中野の住宅街に工場を持つ辻さんも「ここに工場が！」と驚くほどの、静かな住宅街の細い道の先にリング・チャケットさんの工場があった。手作りの歴史を感じさせる工場だ。同社の創業は昭和29年（1954年、会社組織は同32年）。創業以来50年になろうとするが、その歴史は、クラシコの服作りの歴史でもある。

「創業者の福島乗一は服作りの専門家ではありませんでした。住友海上に勤務していて、イギリス帰りの同僚が買って帰ってくる背広を知り、いわゆるセビルローのすばらしさに感動し、日本でその背広を作ろうとしました。最初は日本の職人も見たことがありませんから、それを教えようと、休みの日には一流ホテルに出かけて、コー

ヒーを飲んで外国人の服を見るようなこともしました」と当時を振り返って専務取締役の緒方克之さんは言う。「なにが違うかといえば、ラインがきれいで、フィットして、しかも動きやすく機能性がある。当時の日本の服は重くて、かっちりしていて動きにくいものでしたから全然違います。どうやったら作れるのか、その研究の毎日でした。そんな中からイタリアの服作りを知り、勉強にも行きました」と技術部長の金子一さん。

そんな同社がこだわるクラシコの手作り感覚を生かした、現代風な肩パットなしの軽量の服（センツァ・インテル）は、いまや熱烈なファンを生んでいる

「最近肩パットなしの軽い服が出始めていますが、非常に着やすいですね。流行に機敏にディティールを取り入れたセンスある服づくりは参考になります」と辻さん。

製造卸からショップを展開

同社は、基本的に製造卸であったが、4年前から大阪キタの裁判所裏に独自にショップを展開している。「メーカーが店舗をもつと、卸を優先するために、どうしても残り物を売りたいくなる。それではダメなんですね。専門店として独立するために、まず、製造とは切り離し、店員をプロにして、オーダーも受けられるような店舗にしました」（緒方さん）。

「卸だけでは、量が増えらるとどうしても値引きの対象になり、原価率が上がりがちです。現在は、卸と店舗の売

上比率は、75対25くらいですが、いずれはこれを、50対50にまで持っていきたい」と緒方さん。

めざすは20~25坪の1店舗で売上が1億円……これを幾つか展開して、売上を伸ばしたい……というのが作戦だ。

「イタリアクラシコの服が若者に支持され、それがセレクトショップと結びついたことで、独自の店舗展開も出来るようになったのではないかと思います。エグゼクティブ用の服となると客層も限られますが、ちょっと手を伸ばせば買える値段で、20代~40代のお洒落な層に支持されています。ショップの展開が成功された理由が分かります」と、辻さん。アパレル製造の世界で、話題になることが多いショップ展開の具体的な成功例は貴重な情報ようだ。

丸縫いの訓練は日曜日に 職人が技術で評価される時代にしたい

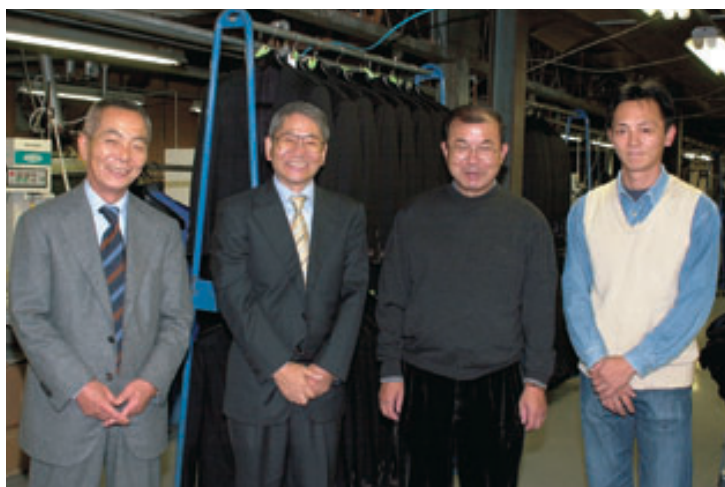
「イタリアクラシコの技術にこだわって服作りをしてきましたが、ここ4、5年若い人が服作りをしたいと遠いところからわざわざ訪ねてくる。工場を見せて大変だから……と説明しても、親と相談してどうしてもやりたい……

と再度来る人もいます。きちんと技術を身につけたら、その技術が評価されるような社会にしたいですね」と金子一さん。同社は、丸縫い教室を日曜日を使って実施しているが、多くの社員が参加するという。

同社が手がけるアイテムは紳士上着、ジャケット、コートなどで、一部婦人服も作る。工場のスタッフはパターンを入れて約50名。他に大分工場に約20名がいる。流れは、貝塚工場で裁断し、大分でパーツを作り、再度、貝塚工場に戻して組立を行う。

裁断は、手でカット。これを見た辻さんは、CAM（裁断機）の導入を勧める。道が狭くて入らない……と嘆く緒方さんに「私の工場も住宅街ですし、CAMは分解して入れられる。私のところは工場もここより狭い。ここならば十分に入ります。1枚裁断でも圧倒的にCAMの方が早いですよ」との話しに緒方さんは、導入に向けて検討するために、辻さんの工場見学を申し込まれた。……ということで、今回は、リング・ジャケットの緒方さんが、辻洋装店を訪問されます。

この訪問を通じて辻さんは「紳士服の生き残りの姿を拝見して、婦人服にもかなり当てはまる事があり、とても参考になりました。」



工場内で。左から同社専務取締役緒方克之さん、辻洋装店社長辻庸介さん、技術部長金子一さん、工場長金子実さん。



本社近くの北区西天満4-7-1にあるショップも訪問。周囲の環境にあった落ち着いた雰囲気のお店だ。



ラインは1本だが、このラインでオーダー服も流される。ベテランの職人さんが多いが、それでも平均年齢は約30歳と少し。若い女性が多いということもある。手作り工程も多い。